

『坊っちゃん』はこんな小説

多くの人々から愛される

小説のあらすじ

「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」無鉄砲な江戸っ子の「坊っちゃん」の少年時代と坊っちゃんの世話役「清」の描写から、この物語は始まります。



成長した坊っちゃんは物理学校を卒業して、四国辺の、ある中学校に数学の教師として赴任します。その赴任先の学校で、早々に坊っちゃんは校長に狸、教頭に赤シャツ、国文学の教師に「野だいこ」、英語の教師に「うらなり」、数学の主任教師に「山嵐」など、あだ名を付けます。

そんな時、教頭の赤シャツから遠回しに、山嵐はよくない奴だから用心しろと吹き込まれ、坊っちゃんは山嵐を「裏表のある奴」と思っています。

そして、着任早々に山嵐からおこつてもらった氷水代を返そうとして喧嘩。結局、山嵐の世話で入った下宿も引き払って、新しく萩野家に下宿することになります。

その下宿先のおばあさんから、赤シャツがうらなりのいいなすけであること、うらなりを気の毒と思うと同時に、これまでの行動から本当の「裏表のある奴」は、赤シャツだったと気づき、山嵐と和解します。

そんな時、赤シャツの策謀で、うらなりは九州の延岡に転任させられることになり、その送別会で赤シャツやマドンナをからかう祝辞を送った山嵐に、坊っちゃんは胸がすく思いになります。

日露戦争勝利の祝勝会の日、坊っちゃんも山嵐は中学校と師範学校の生徒の乱闘事件に巻き込まれ、赤シャツに乱闘事件の責任をなすり付けられた山嵐は免職させられます。

この赤シャツの非道に憤激した坊っちゃんも山嵐は、赤シャツと野だいこに拳闘で制裁を加えます。

そして、中学校に辞表を提出した坊っちゃんは東京に帰り、街鉄(東京市街鉄道)の技手となって清と清が死んだ後、小日向の養源寺に葬ったことを記してこの物語は終わります。

登場人物

坊っちゃん
主人公。旗本の家柄。無鉄砲な江戸っ子気質の持ち主。四国辺の、ある中学校で数学教師になる。

山嵐
会津出身。数学の主任教師。名字は堀田。球栗頭。正義感の強い性格で生徒に人望がある。

清
坊っちゃんの家世話役。明治維新で没落した田舎ある家の出。坊っちゃんを溺愛している人物。

赤シャツ
教頭。文学士。フランクの赤シャツを年中着ている。陰湿な性格で、坊っちゃんから毛嫌いされている。

マドンナ
名字は遠山。うらなりのいいなすけ。赤シャツに見初められて親しくなる。小説にはほとんど登場しない。

うらなり
名字は古賀。青く彫れている顔。お人よしで消極的な性格。九州の延岡に転勤させられる。

狸
校長。薄ひげがあり、目が大きく、色が黒い。権威主義者で策士。事なかれ主義の優柔不断な人物。

野だいこ
名字は吉川。坊っちゃんと同じ江戸っ子だが、軽薄な人物。赤シャツの悪巧みの手助けをしている腰巾着。



『坊っちゃん』と松山

特集

坊っちゃん

山嵐

赤シャツ

うらなり

野だいこ

清

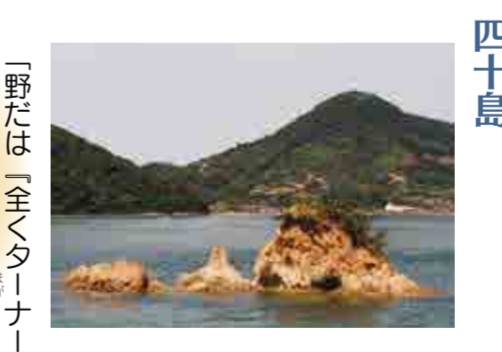
マドンナ

狸

松山観光港、四十島、三津浜港、梅津寺公園、松山城、子規記念博物館、石手寺、道後温泉本館、城の上の雲ミュージアム、県庁、市役所、松山総合公園、JR松山駅、松山空港、興居島、釣島、石手川、坊っちゃんスタジアム

夏目漱石の小説『坊っちゃん』が雑誌「ホトトギス」に掲載されて今年で110年になります。『坊っちゃん』は松山に多くの資源を残し、市民の皆さんにも親しまれている“たから”です。

松山に根付く『坊っちゃん』の世界



「湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいか、この貼札はおれのために特別に新調したのかも知れない。」道後温泉本館の湯男子浴室にある木札。1階中央廊下にはレブリカがあります。

坊っちゃん泳ぐべからず

「野だは「全くターナーです。どうもあの曲り具合だったらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。」

「野だいこ」赤シャツの会話がきっかけで「ターナー島」と呼ばれるようになり、高浜の沖に浮かぶ小島で大小三つの岩の連なりで形成。

坊っちゃん列車

「大変うまいと評判だから温泉に行った帰りにちよつと食べて見た。」

小豆、卵、抹茶の天然素材で色づけされた餡が目印で、松山土産定番の団子。小説で登場しているから、この名前が親しまれるようになりました。

「坊っちゃん」が根付く松山で感じられない空気がある

■松山の印象は？

すくく暖かくて、いい気候だと思いましたが、また道後はしっかりとした観光地で、特に道後温泉本館は建物の外観もそうですが、内側の壁や柱など、歴史や時代を感じさせてくれる存在です。車で10〜15分走るときれいな海もあり、その透明度には感動しました。

■小説『坊っちゃん』に対する印象は？

坊っちゃん目線で読んでみると、寂しい話ですよ。坊っちゃんの苦悩や自分では曲げられない生き方も小説には描かれて、もどかし

「乗り込んで見るとマツ子箱のような気車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思ったら、もう降りなければならぬ。」

1888(明治21)年に日本で最初に開通した軽便鉄道。文明開化のシンボルだったこの列車は、およそ半世紀の時を経て、2001(平成13)年に復活しました。

現代に生まれた「坊っちゃん」のスポット

坊っちゃんスタジアム

松山中央公園内の野球場で、愛称は一般公募によって選ばれたもの。これまで2度、プロ野球オールスターを開催、野球王国・松山の家徴として数々の名勝負がこの地で繰り広げられてきました。

子規記念博物館

『坊っちゃん』関連資料展示中

「坊っちゃん」発表110年を記念し、『坊っちゃん』の複製原稿や関連書籍などを特集展示しています。

【期間】5月まで

【展示場所】子規記念博物館(道後公園)常設展示室3階



新春スペシャルドラマ「坊っちゃん」

坊っちゃん役の二宮和也さんに聞きました

「坊っちゃん」が根付く松山で感じられない空気がある

感じる場面もありました。ドラマでは、もう少しスカッと爽快に見たいだけではないでしょうか。

■「坊っちゃん」を演じる上で心掛けたことは？

実際に原作で描かれている場所に行かないと撮影できない絵や、そこでは感じられない空気感であるんです。そういう意味では、至る所で「坊っちゃん」の文字を見かけ、「坊っちゃん」の世界観が根付いている松山で撮影できたのは大変貴重でした。原作は誰も知っていないと言ってもいい作品なので、皆さんが持っている

背景や景色など、地元に住む皆さんしか楽しめない部分も絶対あります。特にそういうところを観ていただきたいですね。もし、知らない風景があったとしても、ちょっと足を延ばせば、ドラマで撮影していた場所にも巡り合えると思います。

坊っちゃん列車を使った撮影の様子

松山での体験が名作『坊っちゃん』と文豪夏目漱石を生んだ

松山坊っちゃん会会長 武内 哲志さん

松山坊っちゃん会は昭和37年に設立、年に4回の例会や読書会、文学散歩などを通じて漱石とその作品への理解を深めています。

「坊っちゃん」の魅力は、何となくとも個性とユーモアにあふれた登場人物です。例えば坊っちゃんや秋野のばあさんの会話は江戸弁と松山弁が美に對照的で小説の面白さが一層増しています。赤シャツも野だいこも憎み切

れない悪党です。またターナー島を眺めながらの船釣りシーンは高浜の風景や瀬戸内海の釣りの様子がよく描かれています。漱石も誘われて高浜で釣りをしたに違いありません。

漱石は松山を悪く描いていると言われますが、実にユーモラスに作品の舞台を創り上げました。松山人はそれを余計に面白がり、受け入れてきました。

愚陀佛庵では子規から俳句の指導を受け、高浜虚子や柳原極堂など多くの松山の友人を得たことがその後の文豪夏目漱石を生み出しました。

「坊っちゃん」原稿(複製)

子規記念博物館 9315

5666 FAX 9343416